



学校だより

えげのやま

笑顔 元気 やる気 真心



平成25年2月

広島市立矢野南小学校

TEL 888-6811

FAX 888-6822

ホームページ <http://www.yanomiyama.edu.city.hiroshima.jp>

異年齢の関わり合いのなかで



「ここにすわりんちゃい。」「きんちょうせんでもええよ。」「わからんことはなんでもおしえてあげるけえね。」「ぼくのなまえは〇〇いうんよ。わすれんとってね。」後ろから抱きかかえるようにしながらびゅんびゅんゴマの回し方を指導する一コマもありました。

さる1月25日、1年生と矢野みどり幼稚園・保育園児との『なかよしかい』が行われた時のことでした。緊張でガチガチになっていた園児さんたちを1年生が優しい心遣いでリードしていきました。肩にそっと手を置いて微笑みながら語りかけている1年生もいてびっくり。道徳など日々の授業のなかで培ってきた積み重ねが今日の成長につながったと思うのですが、もう一つ忘れてはならないのが6年生の存在です。給食や清掃の時はもちろんなかよしタイムや交流会のなかで、自分が本当に嬉しかった関われ方を6年生から学んでいたのです。相手の気持ちを察しながら関わっていかねば相手も心を開いてくれないし、喜びを共にすることもむずかしい。時にはわがままにつき合ったり、ここは駄目よとつき放したり、6年生も紆余曲折の連続だったと聞きます。5年生と3年生、4年生と2年生も、この1年間、試行錯誤しながら関わり合い、人と人とのつき合い方を学んでいきました。体育館で行った5・3年生の交流会では初っ端に「マイクはいりません！」と5年生の力強いアピール。本気度に圧倒され、3年生は思わず引き込まれていきました。4・2年生の交流会では2年生の国語の学習の成果を4年生が食い入るように聴いてあげることができ、2年生も安心して発表できました。七草や十二支、いろはにほへと等を全員が暗唱発表するのは緊張したと思いますが、4年生のアイコンタクトがあったからこそしっかりと気持ちがつながり、2年生は大きな達成感を得ることができました。

時には言葉で上手に表現できなくて言い争いになったり、諦めて見て見ぬふりをしたことが喧嘩のもとになったりと、うまくいかない関わり合いも多いのですがそれも学びです。教室のなかでも、同年齢で関わり合いながら学び合い、共に成長し合う授業づくりを目指しています。

学校長 佛圓 弘修

心穏やかに字を書く習慣を大切に（書きぞめ会）

今年も年明けに書きぞめ週間を設定し全校で取り組みました。どの作品も一文字一文字でいねいに書かれ、その息づかいを感じることができる作品でした。子どもたちのがんばりに大きな拍手を送ります。（参観日に各クラスに掲示）

書き初めは、正月2日に恵方に向かってめでたい詩句などを書き、これを「とんど焼き」で燃やすのが昔からの習わしでした。燃えかすが高く舞い上がると、字が上手になると喜ばれました。心穏やかに字を書く習慣をこれからも大切にしていきたいと思ひます。



「学ぶ」から「学び合い」へ

「学ぶ」を広辞苑で引くと、①にまねてする、ならって行くとあります。このことから「真似る」ことが学びのスタートであることがわかります。

しかし、子どもの中には、「まねは良くない。」「まねされるのはいやだ。」と思っている子もいます。これは、子どものせいではなく、わたしたち教師、大人に責任があるのです。子どもが真似ようとする時の気持ちをもっと感じとり、学びのチャンスと捉える必要があるのだと思います。きっと、「わからない」「知りたい」「わかりたい」という「学びへの意欲」を発信しているに違いないからです。

残念なことには、「できないこと・わからないこと」をはずかしいと感じ、その場を何とか取り繕うとしていることもあります。このような悲鳴には、何はさておき救いの手をさしのべなければなりません。教師はもちろんですが、子ども同士でそれができたらどんなにすてきでしょう。

このような関わり合いを可能にするのが「学び合い」のように思います。「学び合い」は、わからない子どもの「ねえ、ここどうするの？」から出発します。この質問に答える子ども（クラス）は、つまづいている友だちのつまづきを理解し、つまづいている友だちがわかるように説明しなければなりません。その援助の言葉を受けて、「ねえ、ここどうするの？」を発した子どもは懸命に思考しなければなりません。この他者の援助を媒介とする思考によって、わからない子どもは一人で学ぶことの限界を超えることができます。

教育学者の佐藤学さんは、次のように著書で述べています。

「ねえ、ここどうするの？」という問いかけから出発する学びをつぶさに観察すると、その恩恵が、わからない子ども以上に、応答している子ども（クラス）にももたらされていることに気づく。わかっている子どもは、この応答を通して「わかり直し」を経験している。＜わかる＞にも、いくつかのレベルがある。わかっていること、わかっていることを説明できるレベル、わかっていることを教えることができるレベル、さらにその上に、わかっていることでわかっていない子の問いに対応し、援助できるレベルがある。わからない子どもの問いに対応することによって、わかっている子どもの側がいつそう恩恵を受けることは多い。（岩波ブックレット NO.842『学校を改革する』佐藤学）

わからないことが大切される授業づくりに向けて、全身全霊で取り組んでいきたいと思えるような本との出会いでした。

伝統行事とオリジナル行事

今年も1月13日に中央公園で「とんど」が行われました。見上げるような大中のやぐらが用意されていました。近頃は、竹や稲わらなどの材料を調達するのに苦労されるそうです。矢野町では、場所の確保が難しく「とんど」を行うことができないということを今年初めて知りました。この新しい団地に「とんど」の行事を根づかせていただいたことに改めて敬意を表します。

19日は、やの交流プラザ（矢野駅2階）で四周年記念行事が開催されました。これは、「矢野に住むみんなの交流を図る場をもとう」と矢野駅改修に伴って開設されました。矢野南小学校も年間を通して児童の作品を展示しています。この日催された新春書き初め大会には、家族で訪れ、書に腕を振っている矢野南っ子もいました。（今、作品がやの交流プラザに展示されています。）

